

## 第38課 ショートメッセージ 「マリアとエリサベト」

聖書箇所： ルカ 1 : 39 - 56

暗唱聖句： わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。(ルカ 1 : 47)

第 38 課の聖書箇所は「マリアとエリサベト」です。イエスの母マリアと祭司ザカリアの妻エリサベトは、親類関係にあったと言われていました。

39 節から 45 節で、身ごもって 6 カ月になるエリサベトを訪ねるマリアの場面が語られます。マリアは受胎告知の時に、エリサベトが身ごもったことを天使ガブリエルから知らされます。(1 章 36 節)

マリアは、天使ガブリエルが「聖霊とその力」によって「聖なる者、神の子と呼ばれる」子を宿した事を告げた時、これらの言葉全てを信じて「お言葉どおり、この身に成りますように。」と言います。疑うことなく全てを受け入れたマリアですから、年老いたエリサベトが子を身ごもったことも信じて、共に天使ガブリエルからの知らせを喜びあいたいと思ったのでしょうか。そして、このマリアの深い信仰心からの挨拶に、エリサベトとエリサベトの胎内にいるヨハネが反応します。エリサベトは聖霊に満たされ、ヨハネは胎内で踊ったとあります。この胎内で踊ったという現象は、直訳では「跳びはねた」であり、この事は生物学的な胎動ではなく、救い主キリストの到来の喜びを表す跳躍であるとも言われています。

マリアとエリサベトの出会いの場面は、成人してからのイエスとヨハネの関係を反映したものであるとも言われています。ヨハネはイエスの先駆者として、イエスが主メシア・神の子であることを人々に伝え紹介していくという使命を与えられていました。

人々がイエスを主であると「知るの」はヨハネからであり、主であると「信じるの」は聖霊によってであります。このことは、マリアとエリサベトに聖霊の力により告げ知らせがあり、ヨハネが胎内で踊ったことで、マリアの胎内にイエスが宿していることを表したということと対になっていると考えることができるでしょう。

43 節の「わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。」は、エリサベトがマリアの胎内に主イエスが宿していることを、エリサベトの胎内でヨハネが喜び踊ったことを通して知り、マリアが主イエスの母であるということを知ったことによる、感謝と祝福の言葉であると理解することができるでしょう。

45 節「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです。」とあるように、私たちも、目に見えたから信じるのではなく、主の言葉は信仰によって、祈りを持って信じるということを神さまは望んでおられ、私たちをいつも祝福してくださっていることを、知らなければならぬのではないのでしょうか。

ルカ 1 章から 2 章にかけて、有名な賛歌が三つあります。「マリアの賛歌」(1 : 46~55)「ザカリアの預言(歌)」(1 : 67~79)「シメオンの賛歌」(2 : 29~32)です。これらの歌は、元はユダヤ教徒の作、もしくはユダヤ・キリスト教徒の作であり、一部ルカによる加筆であると言われています。

46 節から 55 節の「マリアの賛歌」は、「マグニフィカト」と呼ばれる有名な箇所、マグニフィカトとは、キリスト教聖歌の一つで、ラテン語詞文の歌詞の一語を以って「我が心、主を崇め」とも言われます。

46 節から 55 節において、マリアは心の奥底から、身体全体から神を賛美します。決して裕福ではなかったマリアの生い立ちも、主は心に留めてくださったと 48 節で言っています。そして、永遠の神キリストを宿したマリアは、いつの世の人にも幸いな人と言われると記されています。

49 節の「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」との表現から、私たちは賛美することの大切なことを学ぶことができます。それは、賛美をするから祝福をいただくのではなく、神が既に大きな祝福をもたらしてくださっていることに、魂から霊から、神をほめたたえるという賛美の祈りをお捧げすることが大切であると教えてくださっていると思います。

主を畏れかしこむことは、全ての人に当てはまることであり、マリアは特別な存在だったから主選ばれ用いられたのではなく、50 節では、そのことを私たちに主は語ってくださっています。ただし、心の奥底から一点の曇りもない真実の祈りと、主を賛美することが必要だと教えてくださり、そして問うてくださっているのだと思います。愚かで罪ある私たちを主は決して見放すことなく、いつも御手を差し伸べてくださっているのだということに、心からの悔い改めをお捧げし赦していただき、感謝の言葉を口にするをお許しいただきたいと思います。

51 節から 53 節では、社会的・経済的・人種的な壁を取り除き壊され、全ての人々に主の愛が、憐れみが臨むことを語ってくださっています。

今、聖書を読むことができる私たちは、マリアという私たちと変わらぬ身分であった人物を通して、主の力強い御業を読み知ることが許され、悦ぶことが許されているのではないのでしょうか。

54 節 55 節では、マリア自身に起こったことはイスラエル民族全ての人々にも起こりうることであり、大いなる国となる約束が預言されていることを歌います。神によって選ばれしイスラエルは、マリアが宿したイエスという救い主によって、救われ祝福されることが約束されているのです。「神に栄光を帰す」その姿から、私たちは神の言葉は真実であり、その真実の言葉をいつでも受け止め受け入れる準備をしていなければならないと思わされます。

56 節は、マリアの賛美の終わりを告げると共に、この後マリア自身とエリサベトに訪れる喜びばかりではない様々な事に思いを馳せます。そしてその事は、イエスと洗礼者ヨハネの身に起こる事を反映させたものであると思われま。

1 章 36 節で 6 カ月になるエリサベトのことが書かれ、56 節で 3 カ月の滞在の終わりを告げています。この時間の記述は、洗礼者ヨハネの誕生の準備がされていることを記していると思われま。

57 節から 80 節で「洗礼者ヨハネの誕生」が語られています。この聖書箇所にも思いを馳せ、心からの喜びをお捧げしつつショートメッセージを終わりにしたいと思います。

## ●分かち合い

- ・どんな状況に置かれても、主に感謝し続けることができると思いますか？

## ※「マグニフィカト」

西方教会（西ヨーロッパで発達したローマ・カトリック教会、及びそこから派生した聖公会、プロテスタント諸教派を指す）ではカンティクム（キリスト教聖歌の一種で、旧約聖書・雅歌に由来）の一つとされ、「聖母マリアのカンティクム」などとも呼ばれています。東方教会（中東・ギリシャ・アナトリア・東ヨーロッパに広がり急成長したキリスト教諸教派で、ギリシャ正教・東方正教会などの呼称）に起源を持つが、9 世紀頃に西方教会にも取り入れられたと言われています。

西方教会では、聖務日課の「晩の祈り・夕の祈り」に用いられ、東方教会では、奉神礼と呼ばれる奉時・祈りの時に用いられています。

(担当：H.I.)